

「全国高校生読書体験記コンクール」中央入賞者発表（敬称略）

※受賞者名・作品名をクリックすると作品に移動します

【文部科学大臣賞】 神奈川県 横浜市立 横浜商業高等学校 一年 J・T ジェイ ティ 教えが自信へ、信念へ（体験書籍『論語』訳／齋藤孝 筑摩書房）

【全国高等学校長協会賞】 島根県立松江北高等学校 二年 鈴木瑛大 すずき えいだい 「主体的」を多面的に考える（体験書籍『思考の整理学』外山滋比古 筑摩書房）

【全国高等学校長協会賞】 愛媛県立松山東高等学校 三年 兼頭玄 かねとう げん か弱さと、逞しさと。（体験書籍『龍風』吉村昭 新潮社）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 茨城県立水戸第一高等学校 一年 齋藤悠一郎 さいとう ゆういちろう 燃えているか!?!（体験書籍『グレタ たつたひとりのストライキ』マレーナ&ベアタ・エルンマン グレタ&スヴァンテ・トゥーンベリ 訳／羽根由 海と月社）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 栃木県 小山工業 高等専門学校 三年 佐藤叶夢 さとうのかのん 斜陽は昇る（体験書籍『はじめて考えるときのように「わかる」ための哲学的道案内』野矢茂樹 絵／植田真 PHP 研究所）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 徳島県立池田高等学校 二年 三本想史 みき そうし 私が兄となるために（体験書籍『絵本のひみつ』余郷裕次 徳島新聞社）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 福岡県立筑紫丘高等学校 一年 綾田樹弥 あやたきひろ ゼロとイチのあいだ（体験書籍『博士の愛した数式』小川洋子 新潮社）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 大分県 明豊高等学校 二年 古市詩乃 ふるいちしの 十年間の備忘録（体験書籍『蜜蜂と遠雷』恩田陸 幻冬舎）

第44回 2024年度

「全国高校生読書体験記コンクール」について

このコンクールは、公益財団法人 一ツ橋文芸教育振興会が、文部科学省、全国高等学校長協会、各地の新聞社、集英社のご後援をいただき、「高校生のための文化講演会」とともに実施している事業です。多くの高校生ができるだけたくさんの方と出会うきっかけをつくることを目的としています。「感想文」を綴るだけにとどまらず、読書によって自分が何に気づき、どのように行動したかをふりかえることが大切であると考え、「読書体験記」といたしました。

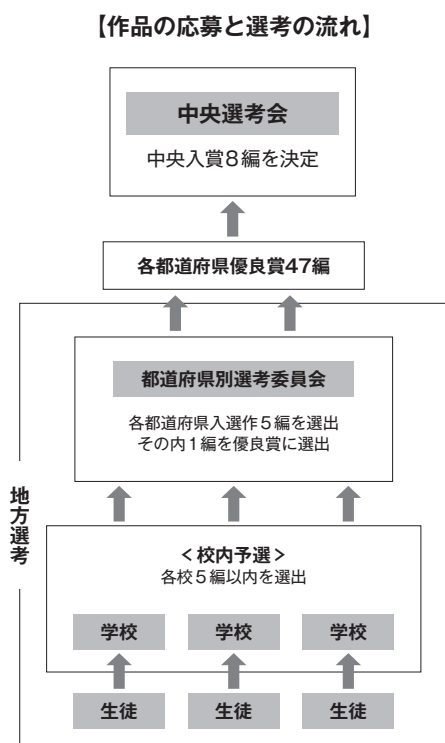
第44回の本年度は、全国47都道府県から399校の参加があり、応募作品は60,493編となりました。

【選考】

◎生徒から提出された応募作品は、各学校の校内予選により5編以内が選ばれ、都道府県別の応募先に提出されました。

◎その後、都道府県別選考委員会において、「都道府県入選」5編が選ばれ、その中で「優良賞」とされた1編が中央選考会に送られました。

◎各都道府県で選ばれた「優良賞」合計47編の中から、中央選考会において、文部科学大臣賞・全国高等学校長協会賞・一ツ橋文芸教育振興会賞の「中央入賞」作品8編が決定しました。



【賞】

中央入賞 8名

- ・文部科学大臣賞 1名 賞状・楯・記念品
- ・全国高等学校長協会賞 2名 賞状・楯・記念品
- ・一ツ橋文芸教育振興会賞 5名 賞状・楯・記念品
- ＊中央入賞者在学の8校には「学校賞」として、楯および「集英社文庫100冊セット」を贈呈します。

優良賞 39名 賞状・記念品

- ＊優良賞受賞者在学の39校には「学校賞」として「集英社文庫50冊セット」を贈呈します。

入選 188名 賞状・記念品

- ＊入選者在学校には「学校賞」として「集英社国語辞典」を贈呈します。

【中央選考委員（敬称略）】

辻原 登（作家）

穂村 弘（歌人）

角田光代（作家）

田村 学（文部科学省初等中等教育局主任視学官）

林 達也（全国高等学校長協会）

【主催】

公益財団法人 一ツ橋文芸教育振興会

【後援】

文部科学省・全国都道府県教育長協議会・全国高等学校長協会・集英社

北海道新聞社・東奥日報社・岩手日報社・河北新報社・秋田魁新報社・山形新聞社・福島民報社・上毛新聞社・産経新聞社・神奈川新聞社・山梨日日新聞社・信濃毎日新聞社・新潟日報社・北日本新聞社・北國新聞社・福井新聞社・岐阜新聞社・静岡新聞社・中日新聞社・京都新聞・神戸新聞社・山陰中央新報社・山陽新聞社・中国新聞社・徳島新聞社・四国新聞社・愛媛新聞社・高知新聞社・西日本新聞社・佐賀新聞社・長崎新聞社・熊本日日新聞社・大分合同新聞社・宮崎日日新聞社・南日本新聞社・琉球新報社

【地方主催】

北海道高等学校文化連盟図書専門部・青森県高等学校文化連盟文芸部・岩手県高等学校文化連盟文芸専門部

【文部科学大臣賞】

教えが自信へ、信念へ

神奈川県 横浜市立横浜商業高等学校 一年

J・T

その言葉が、その文が、私という人間の一端を形成した。私に、生き方を教えてくれた。

私は現在、児童養護施設での生活を送っている。多少の不自由はあるものの、衣食住に何の問題もなく暮らせているため十分だ。時々周りから哀れむような目を向けられることもあるが、私が選択した道なので何も後悔はない。また私がここで暮らしているということは無論、家庭事情に難があることを示している。私は三年ほど前までいわゆるヤングケアラーで、小学一年生の

頃から病気を患う親の代わりに家事をしていた。朝起きてすぐ親の食事の準備や洗濯、掃除、洗い物などやる事は山積みで、学校から帰ってきてそれもそれは変わらない。ただ、少しでもおそろかにすれば出血は免れないため文句を言わずやる、それだけだった。親が離婚していることもあり家庭は経済的に厳しく、私の食事は雀の涙程度だったが小学校の低学年くらいまではそれが普通だと思っていたし、親からも「親のために生きることが子供の幸せだ」と教わっていたため特に何も感じていなかった。

しかし、高学年にもなるとさすがに自分の家の不自然さに気が付き始めていた。痛みを知らない、家事もできない同級生を見下し、謎の優越感に浸っていた自分が、今思うとあまりに滑稽で嘲笑してしまう。ただ、それは普通とは違う自分を守るための防衛本能だった。この歳で家事を一人でやっているなんて凄^{すご}いことだ、どんなに痛くても泣かないなんて偉い、そう言い聞かせなければ私の存在意義や親のためにやってきたことすべてが崩れてしまう。親に愛されていないという残酷な現実を認めること

になる。そして、そう思うほどに誰にも頼れなくなっていた。もし誰かに助けを求めたら、それは自分の家庭が異常なのだと公言するようなものだ。きつとその瞬間から溢れださんばかりの羞恥心と惨めな思いが私を襲うと子供ながらにどこかで分かっていた。

そんな時、私はある人の教えがつづられた本を見つけた。それは儒教の經典の一つであり、孔子や弟子達の言行録をまとめた『論語』というものだった。そこに記してあった言葉の一つ一つが私の価値観のすべてを塗り替え、そして自分自身で決断すること、助けを求めることや他者を頼ることは恥ではないということを教えてくれた。当たり前で、それなのに私が知らなかったこと。二千五百年も昔を生きた人の言葉が紙の束に収められて私の中に流れ込んできた感覚がいまだに忘れられない。まさに私自身を形成した瞬間だった。それからというもの、私は行動することをためらわなくなった。プライドは無駄だと割り切り、大人に頼った。結果、私は一時保護所に預けられ、親と離れて暮らすことになったわけだが、安心のある生活や自分の考えを話す

ことが許される環境はとても心地のよいものだった。

五か月ほどたったある日、私は久しぶりに親と対面することとなった。見ないうちに彼女は私のまったく知らない人になっていて、泣きながら私を抱きしめたが、彼女が何を言おうともその時の私は何も感じる事ができなかった。きつとすでに私の中にある家族への愛や情というものは消え失せてしまっていたのだ。「かせが外れた」これが一番しっくりくる言葉だが、それはあまりにも虚しく、私を異端にする表現だろう。なぜなら、家族というものは血のつながりがあるだけで無条件にお互いを愛することのできる存在だと世間では信じられているからだ。当然私もそう感じていた。どれだけ痛めつけられようと、罵声を浴びせられようと親というだけで嫌いになることも恨むこともできなかった。それが人として普通なのだろう。けれど悲しくはなかった。私はもう、私を支えてくれる言葉たちに出会っていたからだ。たとえ誰かに冷たく哀れな人間だと言われても、人として大切なものは私の中に言葉として刻まれている。孔子先生の教えてくれた正しさは、ち

やんと私の核として存在している。特に、この時の私に最も響いたのは「子曰わく、『教え有りて類無し』」で、人間である上で一番大切なのは学ぶことであり、その人が何に属しているかではない、という意味だ。だから、一般的に人であることの定義に家族を愛することが含まれていたとしても、彼の言葉が私を人として認めてくれる。そして同時にこの言葉からは、家族の一員と分類される以前に私は「私」という一つの存在なのだと言ってもらえているように感じる。たった一人の、遠い昔の言葉だけれど、それを幾千年もの間残してくれた本の存在が私を救った。私が私でいられることも、それを誇れるのも、『論語』のおかげだ。私は、家族という名前に縛られて生きる自分よりも私のために生きる自分が好きだ。たとえそれが人間社会で異質に扱われようと、私は他と違うことをもう恥ずかしとは思わない。正しいと感じることに真っ直ぐでいるだけだ。そしてこの信念を一生貫いて生きる。

【全国高等学校長協会賞】

「主体的」を多面的に考える

島根県立松江北高等学校 二年

鈴木瑛大

ある日、母が一冊の本を買ってきてくれた。表紙の帯には「東大&京大で1番読まれた本」と書いてある。きつとこのフレーズに惹かれて買ってきてくれたのだろうと思った。その本の名前は『思考の整理学』。外山滋比古^{（ひろこ）}さんが書いた本だ。

買ってきてくれたことはありがたいのだけれど、正直に言うと僕は本を読むことが好きではない。しかも、『思考の整理学』だなんていかにも難しそうで、まったく僕の興味をそそらなかつた。だから、母には申し訳ないけれど読んだふりをして後で本棚

にしまっておこうと思っていた。とは言っても、母に何らかの感想を伝える必要があるので、一つのエピソードくらいは読んでおこうと思い、なんとなく本を開きページをめくった。そうしたら、とても興味深い発言が僕の目に飛び込んできた。

「簡単なことだから、朝飯前なのではなく、朝の食事の前にするために、本来は、決して簡単でもなんでもないことが、さつさとできてしまい、いかにも簡単そうに見える。知らない人間が、それを朝飯前と呼んだというのではあるまいか」。この文に心の奥

底で納得したような気がした。僕はかなり単純な人間で、このたった一つの文に一瞬で心を掴まれた。こうして、本当だったら一生読まれることなく埃に包まれるはずだったこの本を、最初から読むことを決めた。『思考の整理学』は、僕に数々の新しい価値観や、考え方を与えてくれた。

それらはどれも先程述べた「朝飯前」という言葉のように、なにか一つの概念を立て化して裏側からそれを見たときのような、奇想天外で、だれどこか腑に落ちるものだった。

この本をすべて読んでみて、印象に残った「外山滋比古の考察」が他にもある。

それは、学校はグライダー人間の訓練所である、というものだ。ここでいうグライダー人間とは、「ひっぱられるままに、どこへでもついて行く従順さ」を持ち、自力で飛ぶことができない人のことだ。つまり、外山さんが言うには、学校は飛行機のように自分で考えられる、主体性のある人間は作らないというのだ。

僕はここで、ある同い年の友人の話を出した。彼は「学校ってじゃがいも工場みたいだよ。画一的なじゃがいもを作るのに優れた、とても合理的な施設だ」と言っていた。小学六年生のときにこのことを言っていたものだから、当然僕はなにを言っているのかさっぱりわからなかった。しかし、今になってその意味がわかった。彼はとても賢く他の人とは別次元の頭脳を持っているから、そのところからこのような大人びた思考をしていたのだろう。

この理論は確かに正しいと思う。だから現代の日本では「主体的に学習に取り組む態度」というような項目を評価して、グライダー人間にエンジンを積ませようとして

いるのだ。

しかし、主体的という項目を他の人から評価できるのだろうか。どうしてもそれは曖昧であり、学校では振り返りの提出点等で評価している。だが、これは今までのグライダー人間を製造することから何も変わっていないのではないか。形だけは主体性というものを評価して、この問題から逃げているだけなのではないか。

僕がここで思うのは、人をそもそもある一定の基準で優れているとか劣っているとか評価するのは間違っているということだ。どうしても、全員を一つの基準で優劣をつけようとすると、その基準において優れている人が偉いと言われ、他の能力を見ずにその基準に優れている人間を作ろうとする。その結果、画一的なじゃがいもが出来上がってしまう。とはいえ、人を何らかの方法で評価しなければ、今の社会はうまく回らない。組織がピラミッド型ではなく平面だった場合、その組織はすぐに崩壊するだろう。

では、どうしたらいいのだろうか。頑張って考えたが、結局別の問題にぶつかって僕一人では解決策は思い浮かばなかった。

「結局のところ俺もグライダー人間なのかなあ」そう思った。けれど、この問題のゴールにたどり着く必要はないのかもしれないとも思った。

なぜなら、僕はすでに主体的な態度を取ったからだ。僕に与えられている条件について受動的に信じるのではなく、「思考」した。グライダー人間という問題への解決策は、今回の僕のように、主体的に考えた人達の誰かが考えれば良い。

このように、こんな読み方でいいのかわからないが、『思考の整理学』は僕に結果的に新たな価値観や考え方を与えてくれた。昔から数多くの人に支持されてきた理由がわかった気がする。「思考」の本質を多面的に覗いたこの経験は、僕の人生をきつと豊かにしてくれるだろう。

体験書籍

『思考の整理学』外山滋比古 筑摩書房

『全国高等学校長協会賞』

か弱さと、逞しさと。

愛媛県立松山東高等学校 三年

兼頭 玄

数秒が数時間にも思えた。夜道、父の運転する車の正面に現れた猪は警告するかのように車体に体当たりした後、山へと去った。僕の故郷弓削島では猪被害が絶えない。

懸命に育てた芋が収穫前に残らず食べられた、原付を運転中に衝突し大怪我をした、等々。電気柵や金網の設置も根本的解決策にはならずイタチごっこが続く。

猪被害の背景には耕作放棄地の増加による猪の生息域の拡大がある。耕作放棄は過疎高齢化による農業の担い手不足が要因だ。その過疎高齢化を島民自身が後押ししてき

た側面もある。不自由な生活を願って、多くの若者を都会へ送り出した。人間が猪を招き寄せたとも言える。人間が招いたものを一方的に害として排除することは正しいあり方なのか。

僕は将来、環境問題や貧困などの社会課題を世界の人々と協力して解決し、「みんなが幸せな社会」を作りたいと考えている。これまで故郷の仲間と海岸清掃イベントを定期的に行ったり、オンラインで世界の若者と議論したり、国際協力の現場に実際に足を運んだりしてきた。しかし活動すれば

するほど、問題を生み出す構造はそう単純ではないと知り、悩みが深まっていく。自分が取り組む活動は、問題の根本的解決に繋がるだろうか。みんなが幸せな社会など本当に実現できるのだろうか。悶々としていた時、この本に出会った。

三毛別熊事件。日本史上最悪の熊害とされる大正四年の事件が『熊嵐』のモデルである。果たして、そこに僕が探していた答えは見つからなかった。代わりに強く印象付けられたことがある。まず人間の「か弱さ」だ。

やつとの思いで築いたさやかな暮らしの礎も、無残に食い殺された隣人の死を悼み遺族を慰めようとする場も、権威と文明の利器を頼みに威勢よく進軍する集団の統率も、たった一頭の羆によって簡単に破壊される。

もちろんそこから得られる教訓もあると思う。人間は自らのか弱さを認め、自然への畏敬と謙虚さを忘れないこと。自然を支配するのではなく自らもその一部であること。と自覚し、相互に生かし生かされんとすること。

だが人間のあるべき姿を本書は明示しない。人間のか弱さをありのままに描く。それにも拘らず、僕は暗い気持ちにはならなかった。羆や社会に翻弄され続ける三毛別や六線沢の人々に、それでも生き続けようという「逞しさ」を感じたからだ。彼らは過酷な状況下に何度おかれても、仲間と支え合い寄り添い合いながら、知恵を絞り工夫して生き延びようとした。「希望」を持ち続けた。

人間の中に併存するか弱さと逞しさ。矛盾とも取れるこの併存こそ、人間らしさ、人間ならではのしなやかさではないだろうか。

本書は僕に希望を持ち続けよと告げる。

この夏、僕はフィリピンで複数の国際協力現場を訪れた。バタンガス州の農業支援現場では日々の食事に野菜を取り入れる上で大きな壁が存在した。住民の中に、野菜を貧しさの象徴として忌避する意識が強いのだ。同州の防災支援現場では防災活動への住民の参加率の低さが悩みの種となっていた。防災が大事と頭で理解はできても日々の稼ぎを優先してしまう。

どちらの現場でも、人間社会を豊かにするための経済活動が人間の生命や安全を守る活動を阻む要因となっている。国際協力で問題を解決する難しさを、僕は目の当たりにした。

ところが活動に携わる当事者たちはどこまでも明るく前向きだった。農業支援活動に従事する三村真理さんは、タガログ語を学んでリーフレットを作り、野菜を使った料理の試食会を重ねている。防災支援を担う川村旭弘さんは地域の行事に積極的に関わり、防災の重要性を説く土台となる住民との関係作りに余念がない。共に自分の任期中に成果が出なくても、未来に繋げるために行動を続けるのだと言う。

それは砂漠に水を撒くようなものかもしれない。しかし、希望を捨てず活動し続ける逞しい意志を、ありのままを受け入れるしなやかさを、僕はそこに見た。

経済発展著しいマニラでは格差が拡大、路地にはストリートチルドレンが溢れていた。ストリートチルドレンへの教育支援現場で元ストリートチルドレンの若者たちに出会った。彼らは教育支援を受けて自立したのち、今度は自らが教育支援を行う側に回っていた。

砂漠と思われた大地に芽が吹き出していた。

僕が撒いた水で芽が出るかどうかはわからない。だが今は思う。そのことに悩んで歩みを止めたくはない。

三毛別や六線沢の人々のように、フィリピンの人々のように、僕もまたしなやかであろう。人間のか弱さをありのままに認めながら、それでも逞しく進み続けよう。

暗く険しいと思っていた道が、険しいけれどもちょっと明るい道に思えてきた。携えるのは、希望という灯だ。

体験書籍

『羆風』吉村昭 新潮社

「二ツ橋文芸教育振興会賞」

燃えているか!?

「私たちの家が燃えています」

十六歳の気候活動家グレタ・トゥーンベリはスピーチで何度もそう呼びかけた。二酸化炭素排出量を削減していかないと、人間には制御できない不可逆的な連鎖反応が起こり、文明は終わりを迎えるというのだ。それをグレタは「私たちの家が燃えている」と例えた。

実際に火事が起これば、誰もが慌てふためいて必死に火を消そうと奔走するだろう。しかし、不思議なことに私の周りでは誰もパニックに陥っていない。この本は書店の

目立つところに平積みされていたのだから、かなりの人が読んでいるはずである。にもかかわらず、世の中は至って平穏だ。

グレタの訴えていることは真実ではないのか。いや、科学者たちが示している根拠を読み解けば、抜き差しならない事態にあることは明白である。ならばなぜ……。

私はテレビで見たある実験を思い出した。オーデションと称して一室に何人かを待機させる。実は被験者は一人だけで残りは全員仕掛け人だ。部屋の中に少しずつ煙を入れる。当然被験者は異常を感じてそわそ

わし始めるが、誰もが平然と座っているの
で、被験者も立ち上がれない。結局、かな
りの煙が充満するまで部屋から逃げ出さな
かった……。

これと同じ事が、今起こっているのかも
しれない。地球温暖化が進んで南極の水が
溶け出し、永久凍土から危険なメタンガス
が放出されて人間の住めない地球になって
しまうと言われても、今のところ皆普通に
生活している。自分だけが大騒ぎするのは
カッコ悪い。そもそも自分は今忙しいのだ。
大変な事態になる前にきっと誰かが何とか

茨城県立水戸第一高等学校 一年

齋藤悠一郎

してくれる……。皆がそう思っているとしたら恐ろしい。

私は小学校一年生の時から、関東の清流と言われている近所的那珂川をテーマに、自由研究を行ってきた。河口から源流に向けて約百キロメートルを遡ったり、水質検査をしたり、那珂川遠泳に参加したり、カヤックを操って川下りをしたりしてきた。そのため自然環境については人一倍関心がある。果たして、この自然豊かな那珂川でもグレタの言うような影響が及んでいるのだろうか。

そんな折、那珂川でのサケの漁獲量が減っているという話を耳にした。十年前、父は晩秋の那珂川を下ったことがある。その時は無数のサケが群れていたそうだ。そこで早速、遡上のピークを迎える十一月の那珂川をカヤックで下ってみた。

一匹のサケも見つけることはできなかった。同行した父もあまりの変わり様に呆然としていた。川釣りをしていた人や小舟を操っている地元の人に尋ねてみると、皆一様に「海面水温が高くなつて、ここ数年サケが上がって来なくなつた」と教えてくれた。グレタの言っていた脅威が、既に現実

のものとなっていたのだ。

川に浮いているペットボトルも気になった。プラスチックは、紫外線や波によって粉々になっていく。こうなると回収することとは不可能だ。自然界で分解されることなく、有害物質を吸収しつつマイクロプラスチックとなつて海に流れ込む。それをエサと間違えた小魚が食べ、大きな魚が食べ、そして人間が食べるという生物濃縮が起こる。プラスチックスープと呼ばれるほど海にプラスチックゴミが漂う海外の様子を、私は、対岸の火事と思っていた。

しかし、那珂川河口の砂を無作為に採取して調べてみると、大量のマイクロプラスチックが見つかった。カヤックにフィルタを括り付けて川を下ると、かなりのプラスチックゴミが入ってきた。

火事は予想以上に広がっていた。どうするか。考えた末に、火を少しでも弱めるため、まずは河口のゴミ拾いを始めた。毎月、同じ場所に行つてゴミ袋数枚分、持てるだけのゴミを拾った。しかし一年間続けてもゴミは一向に減らず、焼け石に水だった。

そこで次に、河口を管轄する行政に対策を求める手紙を送った。丁寧な返事は来た

が、最終的には市民のモラルに期待するしかないとの回答だった。

それならば世論に訴えようと、新聞の投稿欄にプラスチックゴミの問題とそれを拾い続けたことを投稿した。全国版に掲載はされたが、それだけだった。どこからも反応はなく、プラスチックゴミは毎日海へと流れていく。

この環境問題に無関心でいられる人はいなくても、無関係でいられる人はいない。

世界にはグレタを始め環境問題に関心をもつて取り組む若者は大勢いる。自分一人で問題に対峙するのではなく、世界の同じ志をもつ人たちと繋がって共に考えることが必要だと思つた。世界の人々とコミュニケーションをとるために英語は必須だ。今必死に英語を勉強している。

No one is too small to make a difference.
私も間もなく十六歳になる。

グレタの言葉が、私の心に火をつけた！

体験書籍

『グレタ たったひとりのストライキ』

マレーナ&ベアタ・エルンマン

グレタ&スヴァンテ・トゥーンベリ

訳／羽根 由 海と月社

「二ッ橋文芸教育振興会賞」

斜陽は昇る

「まほうつかいになりたいです」

もしもあの日のように自分を生きられたなら。何度でも、無邪気に夢を追いたい。

私はよく、憧れていたはずの夢が分からなくなる時がある。一丁前に白衣を着て実験をこなし、何冊もの本を参考にして考察を重ね、レポートを書き上げる。実験の理解に繋がるような情報を求めて学校以外の図書館にも赴き、はち切れそうなリユックを背負って眠い目をこすりながら帰宅する。他の人が気にかけないような小さな疑問でも、納得がいくまで考え抜いてその答えを

突き止めたい。その一心で、人一倍努力してきた。だが、なぜだろう。この努力がきつと将来に繋がるようにと頑張っているのに、増大する知識に怯えるようにペン先がぐらついてしまうのは。

昔から引越しが多かった私は、またこの一月に引越しをした。見慣れた段ボール箱に荷物を整理していたら、押し入れの奥からかつての私が描いた絵などが大量に出てきた。休憩ついでに、少しだけ過去にタイムスリップするつもりで作品たちに手を伸ばす。するとその中に、小学校から中

学校まで、毎年の新学期に書いた自分の将来の夢があった。学年が上がるにつれて、自分を語ることでさえ周りの目を気にするようになったことを、確かに覚えている。

自分の気持ちのまま行動することに、だんだんと勇氣が必要になった。常識という色鮮やかな泥中に足を掬われ、それでも未来を追いかけてようと、異様に冷たい焦燥に駆られていた。そして、夢に近づこうと腕けば腕くほど、自分自身から自分が遠のいていく孤独感に打ちのめされ、どうにもできない不甲斐なさに、考えることから目を背

栃木県 小山工業高等専門学校 三年

佐藤叶夢

け続けるようになった。

部屋が夕焼けの匂いで染まり、そろそろ思い出を徘徊するのはやめにしようかと思った時、幼稚園のお誕生会で先生から頂いたカードがふと目に入った。にこにこと誇らしげに笑う私の写真の横には、「まほうつかい」と書かれていた。まだ文字を書くことが難しかった私が、先生にお願いして将来の夢を代筆してもらったものだ。初めて自分で考え、叶えてみたいと思った夢。

今まで、将来の夢について悩んできた。しかし、それは本当になりたい自分なのか。その答えを探すように、徐に本書を手にとった。「考える」とは、どのようなことなのかについて考える。数年前に母から譲り受けた本だったが、哲学的な話と聞いて私には難しいと感じ、表紙を見るや否や本棚に仕舞い込んでしまったことを後悔した。今まで読んできた物語とは違う不思議な文章は、今日を彷徨う私と無くしかけた想いを磁石のように引き合わせた。そして私は自分を思い出しに行くため、過去へ飛び込んだ。

かつての私は、勉強でも遊びでも、心躍るものをよく魔法に例えていた。幼稚園生

の頃、母と弟と一緒にドライブで山へ行ったことがあった。瀬戸内海に近いその山は、蒲が所狭しと生えていて、その穂を夜風に混ぜるように振り回すと、微笑むように綻んだ綿毛が、星空へ溶け込んでいった。綿毛は海にぼつりぼつりと浮かぶ筏の柔らかな灯に反射して、魔法のように光の毛玉となって私の好奇心を知らない世界に連れていってくれる。中学生の時に化学に惹かれたのも、理科の教科書で金属の炎色反応を見つけた時、炎は南国の鳥のように色彩豊かに化けるのかと、衝撃を受けたからだ。キッチンで目にする赤色と青色こそ炎の普遍的な色だと思っていたが、その概念を吹き飛ばす現実には、魔法のような未知の世界と計り知れない可能性を感じたのだ。

本書は「考えるとは、身の回りで起きたことを問いと結びつけ、感じることに鋭敏になること」だと教えてくれた。何気ない日常を魔法という色眼鏡で見て、感じて、考えて。自分だけの答えをひたすら探究しながら、他の誰にも歩めない私だけの日々を歩みたい。生きている世界は同じでも、世界の見え方は生命の数だけあるのだらう。日々の傍らにそっと存在する喜憂のひと時

にこそ、夢に近づく楽しさがあり、胸いっぱいに取り込む価値があるのだと改めて気付かされた。

実験に追われる中でも心に陽が差す瞬間があった。採取した水の硬度を測定し結果をスライドにまとめて発表した時のことだ。常日頃のレポート作成で培った知識と探究力を生かすのは今だと思い、自分は全て英語で発表してみようと決心した。不器用なりにも自信を持って練習し発表に臨んだ。発表後の大きな拍手に、今までの努力が報われた気がして心が解き放たれる思いがした。

私は将来、海に向こうの世界で生物や遺伝子について研究したい。その道中で、私をわくわくさせる魔法はきつと沢山見つかるはずだ。いつか「まほうつかい」になってみたい。斜陽に包まれたあの時の笑顔に励まされ、心躍る夢に手を伸ばす。ありのままに夢を追えることに、喜びと成長を感じながら。

体験書籍

『はじめて考えるときのように
「わかる」ための哲学的道案内』

野矢茂樹 絵／植田真 P H P 研究所

「二ツ橋文芸教育振興会賞」

私が兄となるために

徳島県立池田高等学校 二年

三木想史

私の妹が生まれたのは、今から十二年前のことだ。兄や姉の姿を見て育った当時の私にとって、妹がいることは憧れだった。これからの生活に胸を弾ませていたある日の朝、母から、妹がダウン症という個性を持って生まれてきたことを告げられた。

「お兄ちゃんが妹を守るんやで」と母に託された言葉は、今でも私の胸に刻まれている。妹は特別な存在で、そしてその兄になれたことを、私はそのとき誇らしく感じた。妹が成長していく姿を見ることは喜ばしいことだった。しかし、妹の私に対するそ

つけない態度や、家族の妹に対する特別視を受けて、私の中に芽生えた「妹に居場所を奪われた」という負の感情は、自分でも抑えることができないほど大きくなっていった。私の話を聞こうとせず、母や姉にばかり笑顔を見せる妹を、いつしか私は苦手になっていった。そんな感情すらも忘れかけ、妹との距離が大きくなっていく最中、私は『絵本のひみつ』という本と出会った。『絵本のひみつ』と出会ったきっかけは、今年の夏、著者の勤める大学のオープンキヤンパスに参加し、著者の講義を「友達に

誘われたから」という単純な理由で受けたことだ。最初は絵本について少しの興味もなかったが、著者の魅力的で面白い講義に心惹かれ、「もっと絵本について知りたい」と感じ、購入したのが本書だった。著者が薦める複数の絵本を例に挙げながら、絵本の読み聞かせが持つ様々な効果について説明してくれる本書は、常日頃、本と触れ合ったり、本を読んだりする機会が多いわけではない私の価値観を、大きく変えてくれた。計算され尽くした絵や構成、包み込まれるような温かさを持つ絵本は、人と人とを

繋ぎ、愛情を分かち合い、想像力を豊かにする全年齢対象のツールなのだと、そのとき初めて知った。絵本はただ文字の易しい子供向けの本だと思っていたが、中学生や高校生に対しても読み聞かせをするべきだという意見にも衝撃を受けた。絵本を卒業する年齢などないのだと、そのとき強く感じた。

また、本書を読んでいるとき、母が私に絵本の読み聞かせをしていていた幼少期の光景が脳裏に浮かんできた。母の読み聞かせはいつも温かく、「優しさ」という言葉だけでは言い表せない、大きな愛情で包み込まれるようであった。このようなことを振り返ってみると、「私は母のように妹に愛情を注ぐことができただろうか」「兄として妹を進むべき方向へ導いてあげられただろうか」と、喪失感と後悔だけが、私の心を埋め尽くしていた。そのため、「妹に絵本を読んであげたい」というこの気持ちに、一切迷いはなかった。

「いもうと」という言葉がタイトルに入っていたので、妹を持つ私に何か気付きを与えてくれるのではないかと思い、『あさえとちいさいいもうと』という絵本を、私は

自宅の古い本棚から取り出した。しかし黙読しながら感じたのは、あさえと私とは、幼い妹を持つという事実以外、全く違うということだった。私はあさえと自身を照らし合わせたが、あさえのように、妹に精一杯の愛情を与えられてはいない。私に足りないのは勇気だと、そのとき確信した。

妹へ読み聞かせすることに、多少の抵抗はあった。最後に妹に絵本を読んであげたのは、五年以上前だ。おとなしく聞いてくれるだろうか、と不安はあったが、手に持った絵本が私の背中を押してくれた。そして結果として、妹はすんなり私の読み聞かせを受け入れてくれた。その表情は、大好きな食事のときに見せる、綻ぶような笑顔だった。指遊びをしながらも絵に興味を示す姿が愛おしかった。最後のページを読み終え、拍手を促すかのように私は手を叩いたが、妹は返してくれなかった。しかし、私が虚しさを抱えたまま部屋を出ようとしたそのとき、妹はひとりでに絵本を読み始めた。平仮名と、覚えたばかりの片仮名を一字ずつ声に出して読むその姿を見た瞬間、先程感じた虚しさが一瞬にして消し飛んだ。妹への愛情が少しでも彼女に伝わっ

たようで、心の底から嬉しかった。

体験記を書いている今日まで、妹が私に特別、良い態度を見せたことはない。しかし、私の胸に溜まっていたもやは、若干晴れたように感じられた。『絵本のひみつ』にはこんな言葉がある。「絵本を探すことは、まさに自分を探すことです」。妹への接し方や自分の生き方を示唆してくれたのは、絵本だった。これから先、妹だけではなく、多くの人に悩まされては励まされ、その度に私は自分の弱さを知るだろう。しかし、妹と向き合うことから逃げた過去の私のように、自分の弱さに目を瞑るような人間にはなりたくない。妹が「お兄ちゃん」と呼んで笑顔を向けてくれるそのときが来るまで、私は絵本を通して、本当の自分を探していきたい。

体験書籍

『絵本のひみつ』 余郷裕次 徳島新聞社

「二ツ橋文芸教育振興会賞」

ゼロとイチのあいだ

福岡県立筑紫丘高等学校 一年

綾田樹弥

従妹が学校に行かなくなって何年か経った。変わり者で楽しくて頑固な彼女のことを思う時、今流行りの「多様性」なんて文字が頭にチラついたりする。通信表は今回もオールイチだったそうだ。

「私すごいでしょ。学校に行ってもいいのに、イチを貰えたんだよ。ゼロじゃなかった」

正直僕は、オールイチをつけた学校の仕組みみたいなものがほとほと嫌になった。従妹が抱える葛藤や、自己確立のための踏

ん張りが何ひとつ評価されていないと思っただからだ。多様性を尊重するといいながら、枠の中で丁度よくそれを表現することが求められているような窮屈さを感じるのだ。

しかし従妹は違う。自分の頑張りが、イチとして評価されたと喜んだ。ゼロとイチの間にどんなにか大きな距離があることを彼女は知っているのだ。

数としてのゼロの概念が生まれたのは五世紀のインドらしい。「うつろな」という意味をもってその歴史はスタートした。僕

達の遺伝子にまで組み込まれているこの概念は、今や「無」を示すだけではなく、どんなに複雑で大きな数字も表すことを可能にした革命的な概念だ。

三から三を引くともちろんゼロになる。二個あるりんごを二個食べるとりんごはゼロ個になる。このようにゼロというのは数や物が「無くなった」ことを表している。しかしこれは決して元から「無い」状態を表しているわけではない。すなわちゼロは無くなったことを表すが、一概に「無」を

表すわけではなく、一見単純そうだが、捉え方は無数にある数字なのだ。

この小説の中でキーポイントとなるのが、このゼロが大きな役割を持つオイラーの等式だ。「暗闇に光る一筋の流星」「暗黒の洞窟に刻まれた詩の一行」と作中で表現されているほど、美しい式である。 e 、 i 、 π という互いに独立した概念をたったひとつの式で結び付けているためである。また、この式ではゼロと同じくらいイチの存在も大きいものである。それは、どんな数字にイチをかけても元の数字を変えない、唯一無二のものであるからだ。

「うん、分かったよ」

僕がこういう話を始めると、家族はまっすぐ僕の目を見て真剣な素振りでこんな返事をする。

「だいたい分かったよ」

理解する努力を止めた時の返事だと僕は知っている。数字の話それだけで敬遠されるものだ。

しかし、きつと従妹はこう言うだろう。「よく分からないけど、ゼロもイチも同じだけすごいんだね」

僕が勝手に優劣をつけていたイチもゼロも、比べるまでもなくそれぞれ素晴らしく、それらも全て美しくまとめ上げる式が世の中にはある。これは、どのような多様性も受け入れていこうとする世の中にも当てはまると考えるのは大げさだろうか。

独立した考え方を無理矢理ねじ伏せてまとめるのではなく、互いの独立性を受け入れながら最も美しい方法でまとめ上げる。

これは時代を超えて数学者達が追いかけるリーマン予想や双子素数の予想問題と同じような命題をもっているように思える。

このように考えると紙の上で平面的に存在していた数や数式が、妙に生々しく立体的に見えてくるから不思議だ。

僕は今もう、ゼロとイチの間にある沢山の努力を見つけることが出来る。これは難しい数式を解くために何度も予想を立て仮説を立てるよりも随分簡単なことのように思える。要はイチだゼロだと見た目や固定観念にこだわるのではなく、純粹に、あるものをまずは受け入れることが大切なのかもれない。

そして、世の中においてはあがままを

受け入れることが、オールイチを受け入れる寛容さにつながるのかもしれない。

僕は難しい数式を解くため、今スタートラインについている。

体験書籍

『博士の愛した数式』小川洋子 新潮社

「二ツ橋文芸教育振興会賞」

十年間の備忘録

大分県 明豊高等学校 二年

古市詩乃

中学一年の夏、初めて『蜜蜂と遠雷』と出会った。当時の私は、七年間続けたピアノにある種の倦怠期を迎えていた。音楽で生きていく厳しさを予感しプロの道を諦めていた私は、コロナ禍でコンクールに出ることもできず、すっかり目標を見失った。習い始めた頃の、音を奏でる高揚感も忘れて、ただ漫然と練習していた。そんな時にピアノのコンクールを題材としたこの本を手にとったのは、心の底では「ピアノが大好きだ」と思っていたからだろうか。或いは音楽への愛を忘れたまま、ピアノと別れる事を恐れたからだろうか。

小学校入学前の冬、母が家で弾く姿に憧れてピアノを習い始めた。初めて弾いた曲は「ド」を連打するだけの単調な練習曲だった。メロディーこそ無かったが、自分の指先から音が放たれる快感は、当時六歳だった私をすっかり魅了した。だが、コンクールに出場し始めると、六歳からのスタートは大きなハンデとなった。早期教育が当然であるこの世界では、入賞はおろか課題曲のレベルに達することさえ困難だった。どんなに全力を尽くした演奏も審査員に評価されることは無かった。その度に努力を否定されたような感覚とコンクールの不条

理さを味わった。悔しかった。小学生らしく友達と遊ぶことを自ら制限し、家に籠もって「あの黒い恐ろしい楽器」と何時間も格闘した。どんなに思考を放棄しようともバッハの曲は論理的に、どんなに憂鬱でもモーツァルトの曲は気持ちを奮い立たせて天真爛漫に弾く必要があった。何百回と練習した曲は、何手先が読めていても初めて弾いたかのような新鮮さを求めた。小学四年の夏、初めて全国大会出場を決めた。毎度のように朝から吐き気を催し、心臓は痛いほど早鳴りした。会場に到着す

ると、私以外の参加者が全員プロに見える恐怖を感じる。暗い舞台袖に入った途端、指先が芯から氷のように冷たくなり、今朝まで自由自在だった手は弾き方を忘れたかのような。演奏番号が呼ばれ扉が開かれると、スポットライトの眩しい光が一身に降り注ぐ。震える手で舞台の中央へ進み、暗闇の客席にお辞儀をして椅子に座る。深呼吸をしても鍵盤に置いた手は目に見えるほど震えていて、最初の音を放つと、もう元には戻れないという遅すぎる後悔が浮かぶ。ギロック作曲『ソナチネ』。その軽快な曲調とは裏腹に、私は練習の全てを發揮しようと、とにかく必死だった。最後の和音から手を離すと、安堵で全身が虚脱感に襲われる。ああ、終わった。蹣跚とした足取りでピアノの前に立つと、全身に拍手を浴びた。快感で、全てが報われた気がした。『蜜蜂と遠雷』を初めて読んだ時、まだ現役でコンクールに挑戦していた当時の私には、芳ヶ江国際ピアノコンクールの情景はあまりにも鮮烈で生々しすぎた。規格外の天才風間塵、天才少女栄伝亜夜、完璧で多彩なマサル、決して天才ではなかった己と葛藤しながら、ピアノを愛し夢を追った高

島明石。凡人の私は彼らの才能や音楽への愛を嫉妬し羨望した。

コロナによる休止は、私に大きな変化をもたらした。義務のように毎年出場していたコンクールからの隔離が、私を無意識の重圧から解放した。私のピアノは真の意味で「趣味」となった。そして今、再びこの本を手にとった。今度は芳ヶ江国際ピアノコンクールの聴衆として、コンテスタントが演奏した曲を聴きながら。彼らの音楽は私の中で色彩豊かに息づいた。音楽の根源である自然への讃美や感謝、音楽という行為の愉楽が、彼らの音に乗って活字を超越し私を圧倒した。母なる大地へ音楽を「還元」し、自らを聖なる境地へと昇華させる彼らの姿はただただ美しかった。

ピアノの恩師はよく「音楽には弾く人の性格が現れる」と仰っていた。朝夕曲と対峙して、何百回と咀嚼、反芻、消化、そして吸収する。だから必然的にその人の生き様や信仰のようなものが滲み出てくる。人間の核たるものはどんなに醜悪な部分も音楽の陰に隠れることはできない。だから、身体から放たれた音は常に新しい個性を持ち続ける。たとえ同じ曲であろうと一つと

して同じ音楽は無い。だからこそ、人間の真摯な音楽は美しいのだ。

昨夏、最後のコンクールに出場した。演奏したのは私が一番好きな曲。ショパン作曲『黒鍵のエチュード』。審査が終わり講評を受け取ると、ある審査員の言葉に目が留まった。

「大好きな演奏でした」

ピアノを続けて良かった。そう思った瞬間だった。他人から数字で評価されることよりも、私の愛した音楽が誰かに届き、共に愛してもらえ、嬉しきものは無い。一介のピアノ弾きにとって、どんな賞よりも栄光だった。

そして一年。鍵盤を鉛筆に持ち替えた私は、最後のコンクールさえ遠い昔のように感じる。手の筋肉は薄れ、指も思うようには動かなくなった。私の手は過去を証言するものを喪失してしまった。だから今この私の手で、十年間のピアノ人生の備忘録をここに残したい。

体験書籍

『蜜蜂と遠雷』恩田陸 幻冬舎

何かが紙の束から流れ込む

作家

辻原 登

『教えが自信へ、信念へ』（J・T）

体験書籍の対象が『論語』原典というのが先ず私（辻原）に強いプレッシャーを掛ける。果たして私にそのプレッシャーを払い除けるだけの思考の柔軟性とセンスが内包されているか？ 杞憂だった。「二千五百年も昔を生きた人の言葉が紙の束に収められて私の中に流れ込んできた感覚がいまだに忘れられない」。私はJ・Tさんのその感覚（センス）を疑わない。

『主體的を多面的に考える』（鈴木瑛大）

「……」について思考する。例えば「朝飯前」とは？「学校」とは？ 組織がピラミッド型でなく平面だったら？ 鈴木君の答、「その組織はすぐに崩壊するだろう」。これらの問答の果てに、鈴木君は「思考」そのものについて思考しようという姿勢をみせている。これはもう哲学だ。

『か弱さと、逞しさと』（兼頭玄）

兼頭君は「みんなが幸せな社会」を作りたいと考えている。その考えを実行に移すための、言わば準備として、貧困や公害の現場をたずね、そこに生きる人々、戦う人々を、体験書籍のテキストのように見、考える。つまり読む。読むことはすべての第一歩だ。

『燃えているか!?』（齋藤悠一郎）

「私たちの家が燃えています」という言葉で二酸化炭素排出削減を呼びかけた十六歳の気候活動家グレタ・トゥーンベリ。齋藤君は小学校一年生の時から、地元的那珂川の水質検査や最近では河口のゴミ拾いなど、環境保全に取り組んで来た。グレタの警告は、汚染される那珂川においてもまた対岸の火事ではない。そして、「私も間もなく十六歳になる。グレタの言葉が、私の心に火をつけた!」と結ぶ。

『斜陽は昇る』（佐藤叶夢）

『日はまた昇る』（ヘミングウェイ）の向こうを張ってか、不可能を可能にする呪文のようなタイトルがいい。「まほうつかいになりたい」と願った幼稚園児の頃の言葉が、長じてその願い通り、佐藤さんを言葉の「まほうつかい」に変身させた。「蒲の穂を」夜風に混ぜるように振り回すと、微笑むように綻んだ綿毛が、星空へ溶け込んでいった。まさに魔法だ!

『私が兄となるために』（三木想史）

「絵本」の読み聞かせを介して、十二歳の妹との間の心理的距離を徐々に詰めて行く。なかなか思うようには詰まらない。「絵本を探すことは、ま

さに自分を探すことです」とは体験書籍の著者の言葉。自分探すと妹の心をつかまえようとする努力の重なりがスリリングに切なく描かれている。

『ゼロとイチのあいだ』（綾田樹弥）

時に、手強い文章にぶつかることがある。容易に評価したり、優劣を決められないという意味ではなく、先ず読み手の思考力の総動員を促す体のもの。優れた批評文とはそういうもので、綾田君の作品にはそんな批評の片鱗が窺える。何せ、数学的なゼロは「僕達の遺伝子にまで組み込まれている」とか、ゼロは「無」を示すだけではなく云々……。では「一」（イチ）とは？ といった問いから、人間の寛容さまで説くに至る。

『十年間の備忘録』（古市詩乃）

「あの黒い恐ろしい楽器（ピアノ）」との格闘と和解の物語である。物心つく頃のピアノとの出会い、その人にとって幸せ、それとも不幸せ？ 他のジャンルに比して、音楽演奏家はどうしてもこんなに苦しく、大変な訓練を積み重ねなければならぬのだろうか？ 古市さんの現在の風のような人生を祝福したい。

吾に向いて光る星あり

歌人

穂村 弘

『教えが自信へ、信念へ』に記された言葉の一つ一つに、痛みと表裏一体の強さを感じた。読書体験記においては、自分自身と登場人物に共通点のある本が読まれることが多い。だが、ここで選ばれたのは孔子の『論語』だ。作者は「きつとその瞬間から溢れださんばかりの羞恥心と惨めな思いが私を襲うと子供ながらにどこかで分かっていた」という痛切な思いを抱いていた。そんな「私」の心が、自らに向かって光る星を見つけるように、時間と空間を越えて、特別な一冊の特別な言葉を引き寄せたのだろう。自分が生まれ落ちてしまった星の重力が鎖のように心を縛りつける時、遙かな星の光だけがそれを断ち切ってくれるのだ。

『十年間の備忘録』は、文体そのものに読み手を惹きつける力があった。例えば、「深呼吸をしても鍵盤に置いた手は目に見えるほど震えていて、最初の一言を放つと、もう元には戻れない」など、その時々（の今ここ）の再現性が高い。バツハについて、モーツァルトについて、こんな風に書けるのは、言語的なセンスの良さもさることながら、心と体に刻まれた体験に基づく強さなのだろう。『か弱さと、逞しさと。』には、「人間のあるべき姿を本書は明示しない」と書かれている。この一行が光って見えた。本来の読書体験とはそういうものではないだろうか。国語のテストの答えとは違って、同じ本を読んでも、一人ひとりが受け取るものは違っている。「人間のあるべき姿」は常

に揺れ動いている。確信があるから生きるわけではない。同様に、作者がコミットする社会的な活動も、成果についての勝算があるから人々が関わっているわけではないのだろう。「逞しき」だけではなく「か弱さ」もまた別の形で人間の希望を支えているのかもしれない、と気づかされた。

『燃えているか!?』を読み終えてから、改めてタイトルを見直すと、その多義性に気づかされる。自分の家が燃えているにも拘わらず、住人である我々はまるで画面の向こうの出来事であるかのように熱さを感じていないらしい。根強い正常性バياسから抜け出すにはどうすればいいのか。そんな現実的な話の流れに沿いながら、別の次元に生じる言葉の面白さを感じた。例えば、グレッタ・トゥーンベリの灯した比喩の炎が、遠く離れた日本語話者である「私」の心を燃やす不思議さ。

『主体的』を多面的に考える』の結論は意外なものだった。「頑張って考えたが、結局別の問題にぶつかって僕一人では解決策は思い浮かばなかった。（略）けれど、この問題のゴールにたどり着く必要はないのかもしれないと思った」。え、いいの、と驚いていたら、その理由が説明される。「なぜなら、僕はすでに主体的な態度を取ったからだ。（略）問題への解決策は、今回の僕のように、主体的に考えた人達の誰かが考えつければ良い」。主人公は自分という呪縛から離れて、問題解決へのプロセスを俯瞰的に見る発想が新鮮だった。

『斜陽は昇る』には、二つの夢が描かれている。一つは「私は将来、海の向こうの世界で生物や遺伝子について研究したい」という大人の夢。もう一つは「いつか『まほうつかい』になってみたい」という子どもの夢。この作品を読んで、それらが実は一つのものであることを教えられた。未来のどこかで大人の夢を叶えるためには、子どもの頃の無邪気な夢を忘れないことが重要なかもしれない。

『私が兄となるために』というタイトルに作者の思いを感じた。妹より先に生まれたというだけでは兄ではないのだろう。加えて、対象の本質を捉える目の良さ。例えば、「絵本を卒業する年齢などないのだと、そのとき強く感じた」という言葉があった。また、絵本の読み聞かせの場面の「大好きな食事のときに見せる、綻ぶような笑顔」「指遊びをしながら」といった描写からは、目の前の妹の様子が生き生きと伝わってきた。

『ゼロとイチのあいだ』は意外性のある文章だった。数字や数式の話題が扱われているのだが、読み進むうちに、その全体が大きな何かのメタファのように見えてくる。「よく分からないけど、ゼロもイチも同じですけどいいんだね」と書かれると、それらが生き物のように感じられるのだ。「紙の上で平面的に存在していた数や数式が、妙に生々しく立体的に見えてくる」という感覚がリアルに伝わってきた。

生きる力となり得る読書

作家

角田光代

「ご自身と年齢のさほど変わらない環境活動家の言葉に触れ、近隣の川の清掃をはじめた齋藤悠一郎さんは『燃えているか!?』と私たちに呼びかける。環境問題への危機を訴え不安を煽るのではなく、同じ「家」に住む者たちへの連帯を呼びかける強い言葉を、たのもしき気持ちで読んだ。

『斜陽は昇る』というタイトルはいっけんわかりづらく、独特の形容詞がちりばめられた文章も一読しただけでは、すんなりとは入ってこない。しかしじっくり読むと、だれもがあたりまえに受け止めてしまうものの前で、立ち止まり、摩訶不思議なさくらめきに目をこらす佐藤叶夢さん独自の視線が感じられ、その夢を応援したくなる。

『私が兄となるために』を書いた三木想史さんは、ダウン症の妹との関係を、絵本によってさぐるうとしている。なんて立派な兄だろうかと思ひながら私は読んだ。他者のためばかりではなく、自分自身のためだけに、「人と人との繋ぎ、愛情を分かち合い、想像力を豊かにする」絵本というツールを、わがままに利用してほしいと願う。

綾田樹弥さんの『ゼロとイチのあいだ』は、じつに読ませる文章である。ここに記されたゼロの概念について、目からうろこが落ちる思いで納得させられた。むずかしい言葉を使わずに、抽象的

なことがらを説得力を持って語り、素っ気ない数字に生命力を与えている。

『十年間の備忘録』の古市詩乃さんの文章力もみごとである。小学校時代の発表会の描写など、緊張が伝わって、読んでいる私まで喉がカラカラになるくらいだ。ひとつの苦い挫折を通して、一冊の本の意味が変わる。その体験は、この先、その挫折よりずっと大きな意味を持つはずだと私は思う。

鈴木瑛大さんの『主體的』を多面的に考える』は、本を読むことが好きではないというわりにはきつちりとロジカルな文章で読みやすく書かれている。読書を通して鈴木さんは「考える」とは答えを見つけるためではない、考えることそのものに意義があると発見する。

兼頭玄さんの『か弱さと、逞しさと』の冒頭は獣害について、さらにはフィリピンでの防災、経済格差、ストリートチルドレンへと目を向ける。豊かさを追求するゆえの経済活動が「人間の生命や安全を守る活動を阻む要因」という点で、それらすべてをまとめていることで、ちょっと焦点がぼやけてしまったようにも思う。それでも兼頭さんの行動力には敬意を表したい。

『教えが自信へ、信念へ』を書いたJ・Tさんにとって、『論語』は体験としての読書を通り越し、

生きるための読書であつたろう。そのくらい文章に、自身の生を生きる、という決意の強さと意志がみなぎっている。おそらくすぐるように読んだその読書体験は、この先、ずっとJ・Tさんを支え続けると思う。そうした存在に十代で出会えることは、J・Tさんにとって大きな幸福である。書物を読む、それを噛み砕く、自身の血肉にする、その過程をまっすぐに切実に書いたこの体験記は、私の心に強く残った。

言葉と体験

文部科学省
初等中等教育局主任視学官

田村 学

全国高校生読書体験記コンクールに多くの作品が応募されました。素晴らしい作品の数々に圧倒される思いでした。読書体験記は、読書と自らの体験とを結び付け、つなぎ合わせていくものだと思います。一冊の書籍との出会いが、一人一人の高校生の日々の暮らしを深く豊かなものにしていくことを感じさせる作品ばかりでした。入賞作品について、感じたことを短くコメントさせていただきます。

J・Tさんの『教えが自信へ、信念へ』は、孔子の教え『論語』を自らの生活と重ねています。「二千五百年も昔を生きた人の言葉が紙の束に収められて私の中に流れ込んできた感覚」と表現し、自らの存在とこれからの生き方を、読書を通して確かにしている姿に驚きました。

兼頭玄さんの『か弱さと、逞しさと。』では、社会課題の解決を目指し、「みんなが幸せな社会」を創造することに力を尽くそうとする強い思いを起点にしています。そんな作者が、『黒風』を読むことによって、「希望」を持ち続け「しなやか」に行動し続けようと宣言する姿に力強さを感じました。

鈴木瑛大さんの『主体的』を多面的に考える『は、『思考の整理学』を通して、『新たな価値観』

を手に入れています。受動的ではない「思考」を繰り返す自らの姿の実感と、広い視野で深く考え続ける姿の顕在が、未来社会で活躍する作者の姿を容易に想像させてくれます。

古市詩乃さんの『十年間の備忘録』では、作品『蜜蜂と遠雷』を読み進めながら、自分自身の十年間にわたるピアノ人生を見つめ直し振り返っています。作品との出会いを通して、自分自身の歩んできた道のりを自覚する姿に、言葉で表現する価値を改めて実感しました。

三木想史さんの『私が兄となるために』は、『絵本のひみつ』との出会いが妹との関係に変化を生み出しました。妹への読み聞かせをする中で「絵本を探すことは、まさに自分を探すことです」の言葉をかみしめ、自分の本当の姿を探し続けることを心に刻み込んでいます。

綾田樹弥さんの『ゼロとイチのあいだ』では、『博士の愛した数式』での学びを、日々の暮らしの大切な価値と結び付けています。ゼロにもイチにも素晴らしいさがあり、それこそが多様性を認めることにつながるとする考えは、数や数式の世界が、実に豊かな世界を表していると感じさせてくれます。

齋藤悠一郎さんの『燃えているか?』は、二酸

化炭素によって地球が温暖化し、様々な環境問題が起きていることに対する作者の心の中を表しているようです。『グレタ たったひとりのストライキ』でのグレタ・トゥーンベリの考えと行為に倣い、世界の若者との連帯を志しています。

佐藤叶夢さんの『斜陽は昇る』では、夕焼けに包まれた部屋で、夢を見続ける幼い頃の自分に再会します。『はじめて考えるときのように』『わかる』ための哲学的道案内』を読む中で、わくわくを呼び起こす自分だけの夢の実現を再確認する姿は、夕日が昇るシーンをイメージさせてくれます。入賞された作品は、どれも書籍を深く読み込み、自らの生活経験や日々の暮らしとの関係を明らかにし、今ある自分を確立したり、未来の自分を鮮明に思い描いたりしているように感じました。読書することの大切さとそこでの思いや願い、問いや疑問を言葉に表すことの大切さを目の当たりにすることができました。

言葉と体験、この二つを通して、私たちは多くを認識し、思考を活性化させ、自分自身の中に豊かで確かな価値観を形成していくのでしょうか。読書体験記を表す行為の中に、そうした大切な意味があることを感じさせる選考会でした。

生きる、人間の心と身体と

全国高等学校長協会

林 達也

『燃えているか?』を書いた齋藤悠一郎さんは、カヌーを操り那珂川を下って自分で確かめる行動力に満ち満ちている。温暖化だけではなくマイクロプラスチックの問題に気づき、行政に訴えるにとどまらず、新聞に投稿し世論に訴えてもいる。今は世界の人々とながらるべく必死に英語を勉強している。この燃えている気持ちをいつまでも絶やさずにいてほしい。

『斜陽は昇る』ってどういうことだろう? 佐藤叶夢さんは読書をきっかけに「まほうつかいになりたい」という幼稚園の時の夢を思い出し、「過去へ飛び込」むことを決めた。文章達者であり一文ごとに感心させられた。夢を叶えるべく大きな一歩を踏み出す勇気と行動力があふれる昂る気持ち伝わってきた。

J・Tさんの『教えが自信へ、信念へ』は、いろんなことを考えさせられた。つらく厳しい状況にありながらも、J・Tさんがたくましく生きていくことを心から祝福し、応援したい。『論語』の一節から今までの過酷な状況を破壊することができた。個人として生き抜いていくとする宣言のような文章であった。語り口が抑制的であるだけ余計に葛藤や意志の強さが伝わってくる。「お互いさま」で社会は成り立っている。今後も多くの人を頼り、時には頼りにされながら、生きてい

ってほしい。

鈴木瑛大さんの『主体的』を多面的に考えるのは、挑戦的な文章であった。社会や世間をあるがままのものとして受け入れることを疑い、批判的な視点を持つことは、同調圧力が高い日本に住んでいる私たちにとって非常に大切である。「本質を多面的に覗いた」とあるとおり、「本質」といわれるものであっても決して一面的ではない。これが世界のややこしさでもあり、豊かさの証でもある。『私が兄となるために』を書いた三木想史さんは、読書をきっかけに大きな自己変容を遂げたことが少しほつれた兄妹関係の家族の編み直しにつながっていく。ダウン症の妹に兄である三木さんは「負の感情」を抱くようになっていった。感情、思いは伝染する。「負の感情」は悪循環に陥ったが、『絵本のひみつ』を偶然手にしたことで自身が受けてきた愛情を思い出す。「抵抗」を乗り越え自身が受けた愛情を妹に向ける決意を後押ししたのは読書によるものであった。この複雑な兄の思いも妹には伝わっていくことを確信している。兼頭玄さんの『か弱さと、逞しさ』は、小さな存在であっても諦めないヒトという生き物への気づきの体験である。手にした本は『巖嵐』であったが、自身の体験や経験と結び付けることで、諦めないという強い気持ちを獲得するに至った。

読書により「か弱さと逞しさ」に人間らしさを感じ取り、将来の活動に大きく踏み出すきっかけが生まれた。今後の人生においても「か弱さ」に直面するであろうが、諦めることなく前に進んでいく「逞しさ」を期待したい。

綾田樹弥さんの『ゼロとイチのあいだ』にも人間の逞しさは描かれている。通信表でオールイチの従妹は、落ち込み慣る綾田さんとは異なり「評価されたと喜ん」でいる。虹の色彩を分割できないように、多くのものは連続的に存在している。数字による切り分けは人間が分析するための便宜である。通信表の数字1〜5は数値化できるものから判断された極めて限定的なものでしかない。当然のことながら「人間性」といった数値化できないものは捨象される。綾田さんの従妹は通信表の狭い世界、限界をすでに直感しているのであろう。古市詩乃さんの『十年間の備忘録』には、十年間コンテスタントとしてピアノと格闘してきた当事者の臨場感、迫力が描かれている。小4で全国大会に初出場を果たした描写はスタッカートのように短文が重ねられ、読み手も息がきかず呑み込まれそうになる。最後のコンクールでの審査員の「大好きな演奏でした」という言葉により十年間が昇華された。古市さんとピアノとの付き合い方も新たなステージに入っていくことであろう。

第44回「全国高校生読書体験記コンクール」入賞者（敬称略）

【優良賞】 39編

（ ）内は体験書籍名

北海道	道立	札幌月寒高等学校	一年	川井瑠香	当たり前に憧れを（『きよし』）
青森県	県立	八戸高等学校	三年	佐藤寿里	「日常」を生きること（『この夏の星を見る』）
岩手県	県立	宮古高等学校	二年	佐藤花音	光に向かつて生きる（『小説すずめの戸締まり』）
宮城県	県立	古川高等学校	一年	佐野航平	私のいきかた（『夏の庭 —The Friends—』）
秋田県	県立	秋田北高等学校	二年	村上 響	誰かの悲しみへの祈り（『i（アイ）』）
山形県	県立	山辺高等学校	一年	渡邊朝陽	自分と向き合う（『ゴースト』）
福島県	県立	小野高等学校	二年	根本悠月	無意識の凶器（『星の王子さま』）
群馬県	県立	前橋女子高等学校	二年	谷津和夏菜	人間とガイア（『私の職場はサバンナです！』）
埼玉県	県立	星野高等学校	二年	関 彩花	後悔のないように（『夜のピクニック』）
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校	三年	池田優月	障がい者身の発想の転換（『ヤングでは終わらないヤングケアラー きまぐれヤングケアラーのライフステージと葛藤』）
東京都	私立	早稲田大学高等学院	三年	松川且輝	その退屈な日常を打破せよ（『14歳からの哲学入門 〈7〉を生きるためのテキスト』）
新潟県	私立	東京学館新潟高等学校	三年	手代木 幸	「本が導く」戦争のない平和な世界（『の二年後（なぜ戦争をえがくのか、戦争を知らない表現者たちの歴史実践）』）
富山県	県立	砺波高等学校	二年	斉藤琴音	感情を生かして（『沖晴くんの涙を殺して』）
石川県	県立	金沢泉丘高等学校	一年	丹保亜花莉	気づいたこと。わからないこと。（『雪国』）
福井県	県立	若狭高等学校	二年	山本咲桜	子どもの平和を目指して（『同志少女よ、敵を撃て』）
山梨県	県立	日川高等学校	一年	小澤慶一郎	小田凱人選手（『凱旋 9歳で癌になった僕が17歳で世界一になるまでの話』）
長野県	私立	松本第一高等学校	二年	大日方温香	水色のランドセル（『汝、星のごとく』）
岐阜県	私立	多治見西高等学校	二年	茨木小都美	好きなものは好き（『養老先生と虫 ―役立たずでいいじゃない―』）
静岡県	県立	掛川西高等学校	二年	柴田真由子	やさしい苦しみ（『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』）
愛知県	県立	豊田東高等学校	一年	松尾奈々	待ち続けることから生まれる救済（『夜明けのすべて』）
三重県	私立	セントヨゼフ女子学園高等学校	三年	片岡あい	行動力（『建築家になりたい君へ』）
滋賀県	県立	水口東高等学校	一年	谷口 輝	初めての経験（『また、キミに逢えたなら。』）
京都府	府立	鴨沂高等学校	一年	中野潤之介	冗談が悪口になる日（『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』）
大阪府	府立	河南高等学校	一年	橘 凜乃	本を好きになったきっかけ（『探偵倶楽部』）
兵庫県	県立	姫路西高等学校	二年	大本采和	命が生まれる瞬間（『むかえびと』）

奈良県	県立	畝傍高等学校	一年	西川泰生	生き方を変えたアドラーの教え（『嫌われる勇氣 自己啓発の源流「アドラー」の教え』）
和歌山県	県立	貴志川高等学校	二年	平岡茉椰	未来の光茫へ（『自宅で湿地帯ピオトープ！』）
鳥取県	県立	米子西高等学校	三年	角 弥笑	カラフル ～共に歩む～（『カラフル』※阿部曉子著）
岡山県	県立	倉敷天城高等学校	一年	中田さや	あなたのままで（『私は私のままで生きることにした』）
広島県	国立	広島商船高等専門学校	三年	近藤瑚々	私が主人公（『何が困るかって』）
山口県	県立	下関中等教育学校 高等部	二年	金崎菜央	男性の助産師ができること（『俺は助産師』）
香川県	県立	高松高等学校	二年	田中沙依	諦めたらそこで「人生の」試合終了です（『現代語で読む「たけくらべ」』）
高知県	県立	窪川高等学校	三年	平野琴葉	曙のその先へ（『夜明けのすべて』）
佐賀県	県立	佐賀西高等学校	二年	山口悠希	揺らぎのない心（『ダーリンの進化論 わが家の仁義ある戦い』）
長崎県	県立	猶興館高等学校	二年	徳山真圓	鉄格子の中で見つけた自由（『プリズナートレーニング外伝 監獄式ボディビルディング』）
熊本県	県立	鹿本高等学校	一年	手嶋実玖	流れゆく時と個性（『夜が明けたら、いちばんに君に会いに行く』）
宮崎県	県立	宮崎大宮高等学校	一年	村澤沙羅	ありがとう、ピノ（『ピノ：PINO』）
鹿児島県	県立	鹿児島中央高等学校	一年	深野小春	私を生きたために（『キッチン』）
沖縄県	県立	開邦高等学校	一年	上與那原陽葉里	少女時代的モラトリウム（『女生徒』）

【入選】

188編（各県の校名・氏名は五十音順）

北海道	私立	旭川実業高等学校	二年	土居竜大	僕の手にはバトンが渡された（『そして、バトンは渡された』）
	道立	帯広柏葉高等学校	二年	多治見妃織	本と生きる（『ダレン・シャン』）
	私立	クラーク記念国際高等学校 釧路キャンパス	二年	鳴川咲和	「闘う」ということ（『かがみの孤城』）
	道立	苫小牧東高等学校	一年	川奈野楓葉	文化との出会い（『アイヌの昔話集』）
青森県	私立	青森明の星高等学校	三年	小野奏美	「無駄」を愛して変わる世界（『映画クレヨンしんちゃん 謎メキ！花の天カス学園』）
	県立	十和田工業高等学校	二年	高見冬輝	私の歩み行く先は（『アルジャーノンに花束を』）
	県立	八戸高等学校	一年	木村結実	偶然って、必然？（『また、必ず会おう』と誰もが言った。）
	県立	八戸高等学校	二年	藤澤那々葉	夢に向かう勇氣（『成瀬は天下を取りに行く』）
岩手県	県立	黒沢尻北高等学校	三年	小田島芽吹	人生が色づくのは（『カラフル』※阿部曉子著）
	県立	雫石高等学校	二年	中村はる	「言葉」とわたし（『ボールのようなことば』）
	私立	花巻東高等学校	二年	菊池香琳	未来への一步（『成瀬は天下を取りに行く』）
	県立	宮古高等学校	二年	毛内カレン	本当の音楽（『アドリブ』）
宮城県	国立	仙台高等専門学校	三年	JANTOKHAIJONRAT PAWEE	答えられない問題への答え（『シーシュポスの神話』）
	県立	仙台二華高等学校	二年	菅沼花奏	私が見た世界（『青い光が見えたから 16歳のフィンランド留学記』）

	県立	仙台二華高等学校	二年	中濱亜子	言葉にならない感情（「アーモンド」）
	県立	仙台二華高等学校	二年	堀米咲希	目標の種まき（「成瀬は天下を取りにいく」）
秋田県	県立	秋田高等学校	一年	鈴木柚香	私の革命前夜（「革命前夜」）
	県立	秋田高等学校	二年	門脇優奈	踏み出した先には（「キャットストリート」）
	県立	新屋高等学校	二年	船木万帆	人と本との結びつき（「リボン」）
	県立	能代松陽高等学校	一年	梅田優那	本の中のみんなと、私の成長記録（「かがみの孤城」）
山形県	私立	羽黒高等学校	三年	小林智子	いま、ここを生きる私（「幸せになる勇氣 自己啓発の源流「アドラー」の教えⅡ」）
	県立	山形中央高等学校	二年	鈴木愛依桜	支え合い（「はなちゃんのみそ汁」）
	県立	山形西高等学校	一年	渡辺叶憂	自分を見つめる（「あした、弁当を作る。」）
	県立	米沢興讓館高等学校	一年	狩野佑奈	「ちょっとグリーン」な私がすべきこと（「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」）
福島県	県立	安積黎明高等学校	一年	小島花音	親という存在（「そして、バトンは渡された」）
	県立	安積黎明高等学校	一年	鈴木佑奈	本の魔法（「人間失格」）
	私立	聖光学院高等学校	三年	星 瑚都美	教育の保健室（「ケーキの切れない非行少年たち」）
茨城県	県立	橘高等学校	一年	渡邊心春	綺麗な花を咲かせるために（「西の魔女が死んだ」）
	私立	江戸川学園取手高等学校	二年	繁田 朝	忘れてはならないもの（「遠野物語」）
	私立	水城高等学校	一年	鈴木みなみ	分かり合える世界に（「吃音 ―伝えられないものかしさ―」）
	県立	鉾田第一高等学校	一年	池田聡恭	俺じゃん（「成瀬は天下を取りにいく」）
	県立	水戸第一高等学校	一年	宮崎吉平	私の人生と一冊の本（「カラフル」※森絵都著）
栃木県	県立	宇都宮女子高等学校	二年	杉山 響	川のむこうへ（「この川のむこうに君がいる」）
	国立	小山工業高等専門学校	二年	寶示戸俊太	繋ぐ ―未来への野書き―（「あと少し、もう少し」）
	国立	小山工業高等専門学校	三年	山田大地	癖と右耳（「小説映画 聲の形」）
群馬県	県立	真岡女子高等学校	二年	相田幸穂	相手に認められる人になるために（「愛されなくても別に」）
	県立	桐生高等学校	一年	細井詠太	行動と責任（「アツの習慣」）
	私立	高崎健康福祉大学高崎高等学校	二年	富田妃奈乃	誕生の奇跡と命のつながり（「うまれる かけがえない、あなたへ」）
	県立	高崎女子高等学校	一年	有坂紫音	真の「敵」とは（「同志少女よ、敵を撃て」）
埼玉県	県立	前橋南高等学校	一年	出島百華	偏見のカタマリ（「サンタのおばさん」）
	私立	クラーク記念国際高等学校 CLARK SMART さいたま	二年	須藤榮美	痛みのリマインダー（「海辺のカフカ」）
	私立	栄北高等学校	一年	唐笠智成	太宰治に憧れてしまった男（「人間失格」）
	私立	栄北高等学校	一年	本田壮助	ビートたけしの見る日本（「ニッポンが壊れる」）
	私立	城西大学付属川越高等学校	二年	太田尚樹	Are you a jellyfish?（「小説 夜のクラゲは泳げない」）

千葉県	県立	検見川高等学校	二年	大塚留香	ルルベ　～大切にしたいかった想い～〔Spring〕
	私立	成美学園高等学校	二年	高橋快優	もしもスマホがなかったら〔スマホ脳〕
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校	二年	西川心望	夢を叶えることの責任〔アルケミスト　夢を旅した少年〕
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校	三年	濱田菜摘	障害者として生きる意義〔余命10年〕
東京都	私立	学習院女子高等科	三年	松本唯花	季節を数えて〔春の数えかた〕
	私立	早稲田大学系属早稲田実業学校 高等部	二年	斎藤心薫	夜に二人で散歩をしよう〔夜のピクニック〕
	私立	早稲田大学系属早稲田実業学校 高等部	二年	芳賀恵夏	十七回目の夏〔こころ〕
	私立	早稲田大学高等学院	三年	菅野幹大	自然に育てられる〔山村留学　生まれ変わる子ども・親・村〕
神奈川県	私立	聖セシリア女子高等学校	一年	草薙遙香	小石が転がる時まで〔パリの国連で夢を食う。〕
	私立	聖セシリア女子高等学校	二年	大野加奈	ひまわりとふうせん〔びよちゃんとひまわり〕
	私立	聖セシリア女子高等学校	二年	大野結菜	手の平の上の「小さなまめ」と「大きな塩おにぎり」〔イワンのほか〕
	私立	聖ヨゼフ学園高等学校	一年	松尾和奏	私の友達〔赤毛のアン〕シリーズ1～6〕
新潟県	県立	佐渡中等教育学校 高等部	一年	神藏美也子	食べられる野草で変わった世界〔早わかり食べられる山野草12か月〕
	県立	三条高等学校	三年	小林優芽	一つのことにとらわれずに〔アルジャーノンに花束を〕
	私立	新潟清心女子高等学校	一年	大高志緒理	人間不信革命〔六人の嘘つきな大学生〕
	私立	新潟清心女子高等学校	一年	高橋一恵	私の中の正解〔あの夏の正解〕
富山県	私立	片山学園高等学校	一年	松本爽良	《自由》と「学ぶ力」のために〔勉強するのは何のため？　僕らの「答え」のつくり方〕
	県立	富山商業高等学校	二年	山崎駿介	デザインの再考〔塑する思考〕
	県立	富山中部高等学校	一年	佐伯結莉	不安からの支配〔優等生サバイバル　青春を生き抜く13の法則〕
	県立	福岡高等学校	二年	高橋香実	ことばの沼に浸かる〔言語オタクが友だちに70日間語り続けて引きずり込んだ　言語沼〕
石川県	県立	金沢桜丘高等学校	二年	今村美月	幸せを探すために〔涙を食べて生きた日々　摂食障害　体重28.4kgからの生還〕
	国立	金沢大学附属高等学校	一年	橘　葵衣	それでも救いたい〔共に生きるといふこと　be humane〕
	県立	工業高等学校	一年	田島陸翔	震災と暮らす日本〔絆って言うな！　東日本大震災―復興しつつある現場から見えてきたもの〕
福井県	県立	鹿西高等学校	二年	楠　泉澄	働くことでしか得られない幸せとは〔虹色のチョーク〕
	県立	羽水高等学校	二年	岡林大知	『優等生サバイバル』を読んで〔『優等生サバイバル　青春を生き抜く13の法則〕
	県立	金津高等学校	二年	伊藤未桜	孤独に耳をすませて〔52ヘルツのクジラたち〕
	県立	武生高等学校	二年	大河采加	門の先〔カフカ短篇集〕より「掟の門」
	県立	藤島高等学校	一年	清水心春	空を見上げ、日常を慈しむ〔博士の愛した数式〕
山梨県	県立	甲府東高等学校	二年	深澤美羽	私は舞台で「私」を見つける〔宙わたる教室〕
	県立	甲府南高等学校	一年	小宮山采佳	「運」とは何か〔運転者　未来を変える過去からの使者〕

県立	甲府南高等学校	二年	兼田茉莉花	人生の偉業（「山中伸弥先生に、人生とiPS細胞について聞いてみた」）
県立	日川高等学校	一年	岸本光将	『優等生サバイバル』を読んで（『優等生サバイバル 青春を生き抜く13の法則』）
長野県	中野西高等学校	一年	湯本心優	成長（『夜が明けたら、いちばんに君に会いに行く』）
県立	松本国際高等学校	二年	遠藤駿次朗	共に生きる社会（『ベルナのしっぽ』）
私立	松本国際高等学校	二年	久保蒼依	あの子が伝えてくれたこと（『10万の1』）
私立	松本第一高等学校	二年	太田伸幸	出発点の約束（『2020年6月30日にまたここで会おう 瀧本哲史伝説の東大講義』）
岐阜県	大垣北高等学校	一年	宮島愛子	家族からの愛（『そして、バトンは渡された』）
県立	岐阜北高等学校	二年	藤澤芽生	百合と私の戦争体験記（『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』）
県立	岐阜北高等学校	二年	細川新奈	だから彼女は生きる（『同志少女よ、敵を撃て』）
県立	本巣松陽高等学校	三年	青山彩華	今伝える（『ずーっとずっとだいすきだよ』）
静岡県	掛川西高等学校	二年	村松小百合	平安時代への憧憬（『恋する伊勢物語』）
私立	静岡サレジオ高等学校	一年	望月直輝	狂い咲け、夢（『グッバイ宣言』）
県立	浜松湖南高等学校	二年	鷺見青依	私の父（『もう一度、お父さんと呼んでくれ。』）
県立	浜松西高等学校	一年	山田幸広	オノマトペの極み（『犬は「びよ」と鳴っていた 日本語は擬音語・擬態語が面白い』）
愛知県	一宮高等学校 全日制	一年	上橋未侑	手紙屋が私に教えてくれたこと（『手紙屋 僕の仕事活動を変えた十通の手紙』）
私立	相山女学園高等学校	三年	小出美有	寂しさを感じる時（『おとうと』）
県立	豊田工業高等専門学校	二年	田中 葵	私の知らない橋（『図解・橋の科学』）
県立	豊橋西高等学校	一年	上田あいり	本当の自分（『夜が明けたら、いちばんに君に会いに行く』）
三重県	暁高等学校	一年	上園陽亮	過去を学び、私達は今を照らす光となる（『ドイツ中世英雄物語Ⅰ ニーベルンゲン』）
私立	暁高等学校	二年	野田いぶき	じぶん心発見！（『アルジャーノンに花束を』）
国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	大川大和	勤勉を求めて怠惰に行き着く（『世界一流エンジニアの思考法』）
国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	大杉勇介	その舟に乗る罪人は悪人か（『山椒大夫・高瀬舟』）
滋賀県	高島高等学校	二年	落川愛心	幸せの条件とは（『幸せの条件』）
県立	玉川高等学校	一年	上田紅空	なんとなく思うこと（『犯人のいない殺人の夜 新装版』より「踊り子」）
県立	東大津高等学校	二年	徳田杏華	大切にしたいもの（『光のどこにいてね』）
県立	水口東高等学校	一年	齊藤成美	「自分」と向き合うこと（『夜が明けたら、いちばんに君に会いに行く』）
京都府	桂高等学校	三年	山田彩楠	「おかえり」の家（『農ガール、農ライフ』）
私立	京都女子高等学校	一年	宮本唯花	命の使い方（『ようこそ地球さん』より「処刑」）
府立	東宇治高等学校	一年	東條茉生	盲導犬と歩む日々（『盲導犬不合格物語』）
私立	立命館高等学校	二年	桑田結衣	言葉の力（『言葉は現実化する 人生は、たったひと言から動きはじめる』）

大阪府	私立	大阪桐蔭高等学校	一年	西村莉菜	思い出はかくれんぼうをする（『もりのかくれんぼう』）
	府立	四條畷高等学校	一年	近谷彩子	未来の自分へーやるせない思いを超えてー（『かがみの孤城』）
	府立	天王寺高等学校	二年	宮崎初音	戦争の虚しさ（『戦場のコックたち』）
兵庫県	私立	明浄学院高等学校	一年	竹森はな	高一で生まれて初めて感想文（『町田くんの世界』）
	県立	加古川東高等学校	一年	梶原凜子	今の私の死生観、そして私の夢（『満天のゴール』）
	県立	川西緑台高等学校	一年	三谷円栴	葛藤（『青森ドクターへり 劇的救命日記』）
奈良県	県立	姫路東高等学校	一年	水野心陽	五分二十八秒（『君の臓臓をたべたい』）
	県立	北摂三田高等学校	一年	清瀬由比奈	自分らしく（『さよなら、灰色の世界』）
	県立	畝傍高等学校	一年	岡橋 悠	生きるということ（『ライオンのおやつ』）
和歌山県	県立	郡山高等学校	一年	安達 悠	私の生き方を変えたもの（『ライオンのおやつ』）
	県立	郡山高等学校	一年	中川夏鈴	命の重み（『泣くな研修医』）
	県立	青翔高等学校	二年	山添華奈	私になりたい助産師（『助産師になるには』）
鳥取県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	生駒遙那	舟を編む、言葉紡ぐ（『舟を編む』）
	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	江川好香	今、この瞬間を全力で生きる（『余命10年』）
	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	上野山朋花	光が照らしてくれた未来（『産声のない天使たち』）
岡山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	佐伯芽依	異なる者の平等（『話を聞かない男、地図が読めない女』）
	私立	境港総合技術高等学校	三年	竹内心勇	海がくれたもの（『センス・オブ・ワンダー』）
	私立	青翔開智高等学校	二年	岡田萌那	大人になること（『ケーキの切れない非行少年たち』）
広島県	県立	鳥取西高等学校	二年	多内 涼	私（歌え！ 多摩川高校合唱部）
	県立	米子北斗高等学校	一年	倉井遙加	幸せを知る（『エミリの小さな包丁』）
	県立	出雲商業高等学校	二年	春木璃子	全ての生き物が共生する社会へ（『世界を、こんなふうに見てごらん』）
岡山県	県立	出雲商業高等学校	三年	鈴木 樹	私のお母さん（『さよなら、田中さん』）
	県立	松江東高等学校	一年	福田奏子	中間地点にいる私（『恋できみが死なない理由』）
	県立	松江南高等学校	一年	目良歩美	チャレンジスピリット（『成瀬は天下を取りに行く』）
広島県	県立	岡山朝日高等学校	一年	一番ヶ瀬結人	生きるを信じる（『バリ山行』）
	県立	倉敷商業高等学校	一年	竹安 颯	精一杯生きることの大切さ（『20歳のソウル』）
	国立	清心女子高等学校	一年	長尾歩佳	吃音が教えてくれたこと（『僕は上手にしゃべれない』）
広島県	国立	津山工業高等専門学校	三年	武地楓音	踊るわたしの人生（『財布は踊る』）
	私立	崇徳高等学校	二年	岸田紗耶子	一位であり続けること（『優等生サバイバル 青春を生き抜く13の法則』）
	市立	広島市立基町高等学校	一年	五升田結芽	認めきれなくとも認める（『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』）

	市立	広島市立基町高等学校	一年	塚本真悠	サイコーの人生を（『ぼくらのサイテーの夏』）
	私立	広島文教大学附属高等学校	二年	村田サマンタ	諦めないこと（『ハイキュー!!』）
山口県	県立	厚狭高等学校	一年	河口陽菜子	笑顔の仮面は必要か（『蹴りたい背中』）
	県立	大津緑洋高等学校	一年	谷村悠斗	高校生今昔（『高校生活ってなんだ』）
	県立	下松高等学校	二年	長加宙奈	踏み出す勇氣（『あらしのよるに』）
	県立	熊毛南高等学校	一年	島田璃子	ひとつの選択（『時給三〇〇円の死神』）
徳島県	県立	城東高等学校	二年	元川陽向花	友だちとは（『きみの友だち』）
	私立	生光学園高等学校	二年	當利蓮花	孤独を抱きとめる（『わたしを離さないで』）
	私立	徳島文理高等学校	二年	四宮真一郎	「武士道」を受け継ぎ、そして未来へ（『武士道』）
	県立	名西高等学校	二年	三上碧惟	コトバ（『さみしい夜にはペンを持て』）
香川県	県立	観音寺第一高等学校	一年	要 蓮太郎	建築家になりたかった僕と隈研吾（『建築家になりたい君へ』）
	県立	高松工業高等学校	二年	湊 鈴	青が色付く日（『人魚の眠る家』）
	県立	高松商業高等学校	一年	大西芽生	静かなるファイター（『藤井聡太が勝ち続ける理由 王座戦―八冠の先へ』）
	市立	高松市立高松第一高等学校	一年	林 富貴	後悔しないために（『成瀬は天下を取りに行く』）
愛媛県	県立	宇和島東高等学校	二年	田中一成	レッドでホワイト（『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』）
	県立	新居浜西高等学校	一年	鴻上しずく	愛が結ぶ絆（『家族だから愛したんじゃないやなくて、愛したのが家族だった』）
	県立	北条高等学校	二年	清水海玲	私の知らなかった両親の愛（『ドキュメント 奇跡の子トリンミの子を授かった夫婦の決断』）
	県立	三島高等学校	三年	長野紀久美	老いに向き合う（『恍惚の人』）
高知県	県立	岡豊高等学校	二年	野口風花	自分達が作り出す（『人は聞き方が9割』）
	私立	高知学芸高等学校	二年	戸田百詠歌	音楽は生き続ける（『20歳のソウル』）
	県立	高知国際高等学校	一年	山下 瑞	ねこの魔法（『しあわせになった捨てねこ』）
	市立	高知商業高等学校	二年	小松ゆずき	私の生き方（『置かれた場所で咲きなさい』）
福岡県	県立	小倉南高等学校	二年	宮本智那	知らない状態ということ（『ミモザの告白』）
	県立	修猷館高等学校	一年	岸原凜々子	時をかけて（『午前0時の忘れもの』）
	私立	東筑紫学園高等学校	一年	梅崎 早	私たちが今ここに意味（『本心』）
	私立	福岡第一高等学校	一年	猪拓心葉	ロールモデル（『約束のネバーランド』）
佐賀県	県立	唐津東高等学校	一年	面 里望	自分らしい選択（『365日、君にキセキの弥生桜を』）
	県立	唐津東高等学校	二年	高原奈緒美	生きたい未来への準備（『優等生サバイバル 青春を生き抜く13の法則』）
	県立	佐賀西高等学校	二年	江川美咲	嫌われる勇氣で変われ！（『嫌われる勇氣 自己啓発の源流「アドラー」の教え』）
	県立	武雄高等学校	一年	野田彩実	仮面を愛せるように（『他人の顔』）

長崎県	県立	壱岐高等学校	一年	村田汐利	一生ものの出会い（『ツナグ』）
	県立	佐世保西高等学校	一年	相川優衣	未来を見て（たとえ祈りが届かなくても君に伝えたいことがあるんだ）
	県立	長崎東高等学校	二年	上戸龍之介	人生の価値（『日の名残り』）
	県立	猶興館高等学校	一年	松永華奈	私らしさ（『カラフル』※森絵都著）
熊本県	私立	有明高等学校	二年	山野優里	All for one, one for all（『生かされている命 広島・長崎二重被爆者・90歳からの証言』）
	県立	熊本高等学校	二年	高橋咲耶	「言えない」人のための民主主義（『教室を生きのびる政治学』）
	私立	熊本信愛女学院高等学校	二年	佐藤千奈	心の声と歩もう（『アルケミスト 夢を旅した少年』）
	私立	熊本マリスト学園高等学校	一年	若尾佳生	ピエロとして生きるとは（『重力ピエロ』）
大分県	県立	大分豊府高等学校	二年	久保田百合	ヒエラルキーに思うこと（『桐島、部活やめるってよ』）
	県立	杵築高等学校	三年	堀 那菜子	幸せの軌跡（『食堂かたつむり』）
	県立	芸術緑丘高等学校	二年	又吉琉那	思いやりの、その先へ（『差別は思いやりでは解決しない ジェンダーやLGBTQから考える』）
	私立	昭和学園高等学校	一年	田邊璃奈	扉のその先（『宙わたる教室』）
宮崎県	私立	聖心ウルスラ学園高等学校	三年	河野心愛	祖母と力を持った本（『新菌科衛生士教本 菌科衛生士概論』）
	県立	宮崎大宮高等学校	二年	野中綾乃	過去を知る（『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』）
	私立	宮崎学園高等学校	二年	高崎芽奈	二日月（『二日月』）
	県立	宮崎西高等学校	一年	高橋虎太郎	命のバトン（『せいめいのれきし 改訂版』）
鹿児島県	県立	甲南高等学校	一年	紫尾心陽	幸せの在り処（『西の魔女が死んだ』）
	県立	古仁屋高等学校	二年	小田あずさ	母娘（『星を掬う』）
	県立	鶴丸高等学校	二年	酒匂 粹	じいじへ（『ツナグ』）
	県立	鶴丸高等学校	二年	山口賢人	最高の思い出はいつもこの本と共に（『新レインボー小学漢字辞典 改訂第5版 小型版（オールカラー）』）
沖縄県	県立	開邦高等学校	一年	仲松 蒼	ある夏の午後の静謐に（『ストーリーナー』）
	県立	開邦高等学校	三年	志良堂 結	生きる森（『羊と鋼の森』）
	県立	宜野湾高等学校 通信制課程	二年	玉城智彩	見えるもの、見えないもの（『羅生門・鼻』より「鼻」）
	県立	向陽高等学校	一年	金城季里	誰かが愛する私のために（『ぜんぶ体型のせいにするのをやめてみた。』）

中央入賞者8名の受賞作品、および優良賞受賞者・入選者の氏名・学校名などは、「一ッ橋文芸教育振興会」のホームページに掲載されます。（2月中旬予定）
<http://www.hitotsubashi-bks.jp>